

## もくじ

▽私の生理人類学（岩永光一）	1-2
▽研究室紹介（同志社大学）	2-3
▽研究奨励発表会（九州）	3-4
▽研究奨励発表会（関西）	4
▽時代を横断する人類学（本井碧）	4-5
▽学会動静	5
▽会議録	5-6
▽from Editors	6-7

### 【私の生理人類学】

岩永光一（千葉大学）

#### ●初めて生理人類学という言葉聞いたのは？

覚えていません。ただ、修士論文の内容を当時の学会誌である「The Annals of Physiological Anthropology (APA)」に投稿したのが、修論審査が終わった直後の1983年2月でした。1983年というのは、1978年に設立された生理人類学懇話会が生理人類学研究会に改称され、学術誌としての体裁を整えたAPAが最初に刊行された年です。当時は研究室も人間工学教室と称していましたし、私は生理人類学という言葉やその学会のことはほとんど意識せず、毎日の楽しい学生生活を堪能していました。このように考えてみると、本学会の存在を意識し始めたのは丁度この頃で、それからのおよそ30年の間、生理人類学と学会にお世話になってきたといえます。

「生理人類学とは？」という議論が学会の中で盛り上がり始めたのは、おそらく1990年頃からはではないでしょうか。佐藤方彦先生を中心に、各地での合宿勉強会や週末の研究会など、生理人類学を語る機会が頻繁に設けられました。私がこのような機会に参加するようになったのは菊池安行先生にご尽力を賜った1995年の千葉大学着任の頃からです。全国各地でのいろいろな思い出がありますが、私にとってのエポック

メイキングとなったのは、私が湯河原会議と呼んでいる1999年9月25・26日の神奈川県湯河原町での合宿勉強会です。この時、佐藤方彦先生は、時実利彦先生が「みすず」第1巻8号（1959年）に発表された「人間性の探究」と題する随筆や、佐藤先生ご自身がまとめられた人類学者、生理学者、哲学者のリストなどの資料を使って、学生時代に受けた先生の授業さながらに、人間研究のロマンを熱く語って下さいました。その時の資料は今でも大切に保管し、私自身が担当する生理人類学の授業で学生に紹介しています。

#### ●『ヒトの純粋科学は生活者としてのヒトを対象とせねばならぬ』

これは、2007年の5月に佐藤先生から電子メールで頂戴した言葉です。メールそのものは残っていませんし、どのようないきさつでお送りいただいたのかも覚えていません。ただ、私はこの言葉に深い感銘を受け、メモとして保存しておりました。皆様方は、どのようにこの言葉を理解されるでしょうか。私には、「人間であること」（岩波新書）などの時実先生の著作の中に書かれている生き生きとした人間の姿が、ここでの「生活者」という言葉と重なって見えてしょうがありません。時実先生のある文章の中に次の一節があります。

『「人間の尊厳」ということをよく申しますが、

知能がすぐれているというだけであるならば、百科事典や電子計算機のほうが、場合によっては、より尊厳があるかもしれません。そうではなくて、「人間の尊厳」というからには、人間だけにできる行為によって尊厳性が与えられているはずです。』

生理人類学は生物科学の普遍的原理を探求するものではありません。生理人類学は、あくまでもヒトを探求する科学です。佐藤先生と時実先生の言葉には、生理人類学のアプローチに対する極めて重要な示唆が込められています。

### ●Physiological Anthropology

ハーバード大学の人類学の教授であった Albert Damon は、1975 年に出版された「Physiological Anthropology」という本を編集しています。この本の存在については、2004 年 8 月 20・21 日に北海道釧路で行われた勉強会(通称、釧路会議と呼んでいます)の時に話題にあがりました。すでにご存じの方も多いかもかもしれません。最近、何気なしにウェブの通販サイトで検索したら在庫が見つかりましたので、早速購入しました。はしがきによると、この本の出版は Damon の没後で(1973 年没)、出版に関してはペンシルベニア州立大学の Paul Baker 教授(当時の肩書きは博士)の協力があったそうです。Baker 教授も 2007 年に亡くなっていますが、生前には佐藤先生とも交流があり、昨年のカナダでの ICPA2013 で会議長を務められたオハイオ州立大学の Douglass Crews 教授は、Baker 教授の最後のお弟子さんだそうです。Crews 教授以外にも、Michael Little 教授(ニューヨーク州立大学)、Cynthia Beall 教授(ケースウェスタンリサーチ大学)など、国際生理人類学連合の会議などで Baker 教授門下の研究者ともお会いしました。ちなみに、Baker 教授と Damon 教授はこの本の中で、各々、「1. The Place of Physiological Studies in Anthropology」と「13. Biological Anthropology as an Applied Science」という第 1 章と最終章を担当しています。なんと魅力的なタイトルだと思いませんか? 当然ながら時代背景は今日とは大きく異なりますが、私は、生理人類学が進むべき方向を示してくれていると解釈しています。

私は、今回紹介したようなさまざまな機会に参加することができ、大変幸運だったと思って

います。今回の寄稿では、その幸運を私の記憶にだけとどめておくのはもったいないと思い、その一部を特に若い学会員の皆さんと共有できればと考えました。私にとっての生理人類学とは、私を研究者の端くれとして今日まで育ててくれたゆりかごのようなものだと思っています。そして、そのゆりかごは佐藤先生や菊池先生、ひいては時実先生、さらには、海外の生理人類学者たちによってゆり動かされていると言うことです。

### 【研究室紹介】

#### 同志社大学大学院スポーツ健康科学科 福岡義之

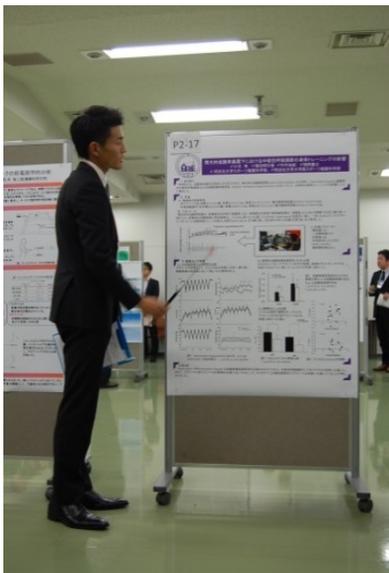
2010 年 4 月、16 年間お世話になった熊本県立大学環境共生学部から同志社大学スポーツ健康科学部に異動しました。これまでは栄養学を主専攻とする部署でしたが、古巣のスポーツ科学系に戻ってきたこととなります。同志社大学スポーツ健康科学部は、2008 年に学部がスタートしましたので、私は設立時のスタッフと比べて 2 年遅れて異動したことになります。



#### 新たな実験室

昨年までは「ヒト歩行における呼吸・循環・筋の協働と環境適応」というテーマで、科研の仕事を前任校や研究分担者のラボで行いつつ、徐々に新たなラボの準備をしてきました。スポーツ科学という専攻ということもあり、こちらでは生理人類学とスポーツ科学を融合させた研究テーマとして、「低酸素暴露に関するヒト、特にアスリートの環境適応」について調べていこうと思っています。ラボのセットアップの都合のため昨年頃から、ようやく実験データをお見せできる状況になりました。2 枚目の写真は、昨年本学で開催された第 69 回日本生理人類学会大会において、4 年生の小又亮君が「間欠的低酸素暴露と

身体トレーニング」に関する研究成果を発表しているところです。



#### 小又亮君（同志社大4年）のポスター発表

異動後、初めて受け持った学生にも、このように成果が出始めてほっとしているところです。また、今年4月、新棟建設から新しい環境生理学実験室もできました。本格的な研究活動のためには大学院生やポスドクのスタッフが益々必要になってきました。同志社大学博士後期課程では、授業料が実質免除となっている上、育英会とRA（リサーチアシスタント）としての奨学金制度もあります。人類学的環境適応能について、高地馴化や高地トレーニングの視点から取り組んでいきます。さらに2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けたヒト・パフォーマンスの身体能力最大化についても取り組んでいきます。興味ある学生さんは同志社大学環境生理学研究室まで是非お越しください。

#### 【2013年度研究奨励発表会（九州地区）】

小崎智照（九州大学）

研究奨励発表会は、生理人類学の若手研究者同士の交流を深め、若手の研究の活性化を目的として活動しています。今回は2014年2月8日（土）に九州大学大橋キャンパスにて行われました「2013年度研究奨励発表会（九州地区）」について、ご報告いたします。

今大会は13演題の申し込みがあり、遠くは千葉大学から発表をいただきました。全ての発表に対して参加者全員による投票を行い荒井雅貴

さん（九州大学）、落合将太郎さん（九州大学）、中塚力さん（千葉大学）が優秀発表賞に選出されました。荒井雅貴さん（九州大学）は「血管内皮細胞内 PKC $\alpha$  の部位特異的な運動の解析」という題目で、血管内皮細胞の移動に参与する PKC $\alpha$ （Protein kinase C  $\alpha$ ）というたんぱく質を長時間観察するための新たな手法と、その手法を用いた PKC $\alpha$  の動態について発表されました。



#### 研究発表奨励会の様子（九州地区）

落合将太郎さん（九州大学）は「夜間の異なる色光曝露時の非視覚作用を介した生理指標の評価」という題目で、赤や青の異なる色光を被験者へ曝露し、それぞれの色光曝露による心理的作用や生理的作用について発表されました。



#### 懇親会での受賞の様子

中塚力さん（千葉大学）は「触覚の同時呈示が音量知覚に及ぼす影響」という題目で、指先への異なる振幅の振動を与え、各振動条件と音量知覚弁別課題成績との関係について発表されました。また、発表会後には授賞式を兼ねての懇親会を行い、若手研究者の交流が深められ、非常に有意義な会であったと思います。今後も研究奨励

発表会を継続して開催したいと考えております。本発表会は学生を対象としたものですので、現在進行中で研究結果がまとまっていないものでも、参加者からの意見を聞くことができる貴重な機会となると思います。皆様からのご発表と多数のご参加をお待ちしております。

### 【2013 年度研究奨励発表会（関西地区）】

中村晴信（神戸大学）

昨年度に引き続き、本年度も研究奨励発表会が2014年2月15日に大阪駅前の神戸大学梅田インテリジェントラボラトリで開催されました。昨年度は初の関西開催ということもあり、先生方のご尽力で何とか開催にこぎつけたのですが、今年は2年目ということで果たして開催できるのか大変不安でしたが、今回も前回と同じ10件の演題エントリーがありました。関西地区の特徴として、件数に比し発表者の所属が多様であることが挙げられます。今回も、京都大学、大阪市立大学、九州大学、神戸大学、立命館大学と5大学からエントリーがありました。



#### 真剣に聞き入る参加者

発表テーマは、性格特性と食物選択動機との関連性、朝食摂取と生活習慣の関係、食後の眠気に関連する要因、注意欠陥多動性障害児に対する行動療法の有効性、ワーキングメモリとライフスタイルの関連性、木材の壁面デザインと眼球関連電位、メラトニン分泌と午前中の青色光、筆記具の持ち方や動作と心身の負担、手の一側優位性と操作方向の認知、キーボード入力操作における体性感覚の有効性というように発表テーマもバラエティに富んでおりました。参加者も、修士課程院

生に加え、卒論発表を控えた学部4年生も発表しておりました。各々の研究テーマや所属教室の研究領域は異なるものの、いつもとは異なるものの見方を見聞きできたことは、発表者にとっても非常に新鮮な様子でした。研究奨励発表会には、指導教員に加え、“ギャラリー”として生理人類学会の先生方も参加されており、発表者の研究を更に発展させるような温かい質問やコメントをしていただきました。

発表会が終わると恒例の懇親会となります。関西地区発表会は場所が大阪駅前と懇親会の一等地であるため、懇親会上の選定には事欠きません。今回は、発表会場を出て近くのガード下の居酒屋で開催しました。教員と学生と中堅(?)がごちゃまぜに座り鍋を囲み、発表内容の質問の続きや、普段の大学生活についての情報交換など、他大学との交流だからこそ得られる情報と刺激を十分満喫できた様子でした。

研究奨励発表会は学生さんを対象とし、発表テーマも広く募集しています。質疑応答も非常に建設的であり、他大学の学生・教員との交流も温かい雰囲気の中で行われます。是非とも次回の研究奨励発表会（関西地区）へのご参加、ご発表をお待ちしております。

### 【時代を横断する人類学】

（人類学若手の会 第2回総合研究会参加報告）

九州大学大学院統合新領域学府博士後期課程  
本井碧

2014年3月21-23日に東京都八王子市で行われた、人類学若手の会第2回総合研究会の参加報告を致します。この会は広義の人類学に携わる若手研究者が、数十年後の学際的共同研究を見据え、各自の研究内容および所属する分野の研究文化についての情報交換を目的とした研究交流集会です。

初日午後より開会、自己紹介とポスターセッションを行いました。次の日は朝から「フィールドワーク」をテーマとして若手研究者による講演が行われました。生理人類学においてはあまり馴染みのない手法ですが、ボノボが暮らすサバンナから近代化の波が押し寄せるペルーの市場まで、世界中を駆けまわる霊長類・文化人類学の研究者の姿がいきいきと伝わりました。午後からは招待講

演としてベテランの先生方から、研究内容だけでなく研究を志したきっかけや心構えを伺う企画がありました。生理人類学からは綿貫先生がご講演されました。やはり、この会の趣旨である人類学分野の連携の必要性や成功例を示される先生が多かったように思います。その流れで懇親会、お酒も入り深夜まで熱い議論と交流が続けられました。

最終日は「越境する人類学」をテーマに若手の講演が行われました。特に印象的なものとして研究所などに所属する科学者集団を文化人類学的手法で解釈する「科学人類学」について発表が挙げられます。産学連携・科学コミュニケーションなど昨今の研究者が直面する問題にもリーチし得る内容で、ますます人類学の広がりを感じさせられました。

解散時刻を過ぎても議論の熱冷めやらず、駅まで移動しながら、駅に着いても昼食を一緒に...と別れがたい出会いが多数ありました。若手参加者32名のうち生理人類学からは4名と、まだまだ存在感の薄い状態です。数十年後の人類学を見据えて次回参加をご検討いただければと思います。若手の会研究発表会にも他分野の人類学若手研究者をお呼びする予定です。ご期待ください。人類学若手の会のHPは以下のアドレスです。

<https://sites.google.com/site/jinruiwakate/>

#### 【学会動静】

##### ・大会予定

- 第70回大会 [会期] 2014年春  
[会場] 九州大学(福岡県)  
第71回大会 [会期] 2014年秋  
[会場] 神戸大学(兵庫県)

##### ・新入会員の方々(順不同, 敬称略)

※ 2014.2~2014.4

- 正) 畑中 広 東海職業能力開発大学校  
正) 岡田ルリ子 愛媛県立医療技術大学  
正) 森 博康 兵庫大学  
正) 井筒 紫乃 日本女子体育大学  
学) 江口 航平 県立広島大学大学院

##### ・所属変更の方々(順不同, 敬称略)

- 正) 西良 浩一 帝京大学  
→徳島大学運動機能外科  
正) 小島 隆矢 (独)建築研究所  
→早稲田大学人間科学学術院

- 正) 堀内 雅弘 山梨県環境科学研究所  
→山梨県富士山科学研究所  
正) 江口 勝彦 群馬パース大学理学療法学科  
→群馬パース大学  
正) 杉本 吉恵 広島大学  
→大阪府立大学  
正) 藤井菜穂子 国際医療福祉大学  
→所属なし  
正) 高橋 良香 千葉大学大学院自然科学研究科  
→京都大学  
正) 大石 健二 東京国際大学  
→日本体育大学  
正) 黒川 望 金沢大学  
→群馬パース大学  
正) 今西 平 神戸親和女子大学  
→立教大学コミュニティ福祉学部  
正) 安河内彦輝 総合研究大学院大学  
→筑波大学  
正) 田中 望 八戸学院短期大学  
→東海学園大学  
正) 中島 正世 横浜創英短期大学  
→横浜創英大学  
正) 遠藤伸太郎 立教大学  
→中央大学理工学部  
正) 斉藤 リカ 筑波大学大学院  
→日本医療大学  
正) 伊藤 幹 愛知工業大学  
→名古屋学院大学経済学部

※ 正→正会員, 学→学生会員, 海→海外会員

#### from Editors

次号No.3の原稿締切は2014年7月31日です

▽ 会報担当理事を拝命して早くも3年が過ぎました。昨年从小崎理事と新たに始めた企画記事は、ご執筆頂いた先生方のご協力により、ここまで順調に掲載が続いております。今号の「研究室紹介」では、関西地区の同志社大学にスポットを当てました。また、「私の生理人類学」では岩永先生より御寄稿を頂きました。次号は第70回学会大会(九州大学大橋キャンパス)における学会各賞の授与に関連する記事を中心にお届けする予定です。

▽ 今号も企画記事「私の生理人類学」を岩永先生にご寄稿いただきまして第三回目を掲載することができました。また、研究室紹介をご寄稿いただきました同志社大学の福岡先生、研究奨励発表会(関西地区)の報告をご寄稿いただきました神戸大学の中村先生、人類学若手の会第2回総合研究集会参加報告をご寄稿いただきました

九州大学の本井先生を含め、ご寄稿いただきました先生方にはこの場を借りて感謝申し上げます。今後も学会員の先生方からのご寄稿をお願いいたします。さらに私自身が今回執筆いたしました研究奨励発表会（九州地区）は他の地区の研究奨励会と同様に毎回十数演題の発表があり盛況に行われております。こちらについても皆様のご参加・ご発表をお待ちしております。来月には第 70 回大会が私の所属する九州大学にて綿貫大会長のもと開催されます。大会にて皆様にお会いできることを楽しみにしておりますので、多くの先生方のご参加をお待ちしております。

「目には青葉 山ほととぎす 初がつお（山口素

堂）」

▽ PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター

小崎 智照 九州大学 芸術工学研究院

メールアドレス [panews@jspa.net](mailto:panews@jspa.net)

cc. [abed@ip.kyusan-u.ac.jp](mailto:abed@ip.kyusan-u.ac.jp)

cc. [kozaki@design.kyushu-u.ac.jp](mailto:kozaki@design.kyushu-u.ac.jp)

※お問い合わせなどは、上記のメールアドレスに加え、編集委員のメールアドレスを cc.に付けてお送り願います。